

# 常に考えるのは、 学生と社会をつなぐ 大学のあり方です

玉川大学 学長 小原芳明

まとめ／清水由佳 撮影／中岡邦夫



【学長プロフィール】1946年生まれ。米国マンハッタン大学卒業。玉川大学大学院文学研究科、スタンフォード大学大学院教育政策分析専攻修士課程修了。87年玉川大学文学部教授。文学部長・副学長などを経て、94年より現職。日本私立大学協会理事など役職多数。

【大学プロフィール】1929年玉川学園設立。47年玉川大学設立(旧制最後の大学)。50年より通信教育部を開設。67年大学院開設。創立以来掲げる、「全人教育」「個性尊重」「自学自律」などの「12の教育信条」のもと、少人数教育をモットーとする。

日本の社会構造の変化によって、求められる人材像も変わってきており、その中で大学が取り組むべきことは数多くあります。ひとつは、時代に対応した学部編成になっているのかどうかという点です。ここは慎重に検討していくべき課題だと思っています。

もうひとつは、理科離れによる日本の科学技術の遅れを何とかできないかという点。本学でいえば、小学生にもおもしろく理科を教えらるる教員を養成することで貢献できるのではないか。そのためには、教員養成より研究を重視しがちだった教育の考え方を変えていく必要もあるのではないかと考えています。

さらには、4年間で学生の意識を「サービスを受ける側」から「サービスを提供する側」へと変化させていく、トランジションの教育を考える必要もあるでしょう。これまでの大学では、学生が好きなことを実現させていくという考え方が主体でした。しかし、好きなことと社会の需要が合合わないこともあります。また、「会社が好きなことを提供してくれない」という受け身の姿勢のまま会社を辞めてしまうという問題も発生しています。そこで、学士課程の4年間で、「サービスを提供する側」へのトラ

ンジションをいかに導くかを模索すべきと考えています。

このような変化を求められる中、すでに本学で先進的に取り組んでいるのはICT(Information Communication Technology)の活用です。社会のネットワークが高度に整備され、誰もが、どこからでも、いつでも知識を得られる遠隔教育が広がり始めています。本学では約半数の授業を「ブラックボード」というeラーニングシステムを併用して行っています。これは、24時間、自宅からでも学べる教材をインターネットを通じて配信するというもの。今後、3D技術も生かされ遠隔教育はますます進化するはずです。

しかし、どれほど技術が進んだとしても、最終的には「人対人」、フェイストゥフェイスが主体であることには変わりありません。ビジネスでも、外交でも、最終的には生身の人間のぶつかりあいです。人間の社会生活がリアルな3次元である限り、教育も同じくリアルな3次元である必要があります。ICTはあくまでもフェイストゥフェイスの教育の補助。「教育は人なり」という創立当初からの本学の基本精神はこれからも変わりません。